

古典の授業で行き詰まる

何とかしたい古典の授業

中学校の教科書を見ると、各学年ともに古典教材が入っています。自分としては古典が嫌いなわけではありませんが、いざ、生徒を前に授業を行うとなると、どうもアイディアが出てきません。自分が受けた中学校の授業、そして古典文法中心だった高校の授業の経験から脱却できない自分がいました。

古典といえば、やることが決まっており、そこにおもしろさや楽しさはありませんでした。すべてが機械的で、まるでテスト問題に対応するために古典を学習しているようでした。本屋さんで古典の参考書を買ってくれば、それでことは足りると思えました。

「これではいけない」と古典の授業を工夫しようとあがいていましたが、根本的に違っていたように思います。小手先のおもしろさや生徒に活動させるだけの方向へ走ってしまいました。その結果、古典の授業は行き詰っていきました。

困ったら原点に立ち返る

生徒にアンケートをとると、古典に対して「むずかしい」「わからない」「おもしろくない」「読みにくい」というイメージを抱いていることがわかります。多くの生徒は古典の授業を好んではいません。その背景には、歴史的仮名遣い、現代語との意味の違い、さらには、古文特有の言い回しや主語の省略などがあります。

生徒の古典への意識を変えるには、まずは読めることが第一条件です。音読を繰り返し、時間をかければ読めるようになるかもしれません。お決まりの暗唱テストを行えば読めるでしょう。しかし、生徒の意識を変えることができるとは思えません。やはり、プロとしての指導法の工夫が必要です。ただ読む、音読するのではなく、何のために、どのように読ませるか、という視点が必要だと考えました。

「群読」との出会い

そんなときでした。救いの神が現れました。「群読」です。具体的には、高橋俊三先生の「音読・朗読・群読の指導」と「群読の授業」という本です。それまで群読の実践は行ったことがありませんでした。むさぼるように読んでみると、明るく、楽しく、生き生きとした学習活動を展開することができ、古典に親しむというねらいに迫ることができるように思えました。

群読は、国語の総合学習です。文字言語と音声言語を結び、理解学習と表現学習を関連させることができます。群読には、人を巻き込んでいく力があります。学級を前にして、一人では声が出せない生徒でも、級友と一緒に声を張り上げることがあります。声に出すことの抵抗と障害をなくし、音声化を楽しむことができます。

また、群読をするには話し合いが必要になります。そこには価値ある学習が認められます。よい群読を行うには豊かな解釈が前提条件となります。生徒は活発な話し合いを展開し、主張したり実演したりと、教室が活性化します。群読は、古典の学習に適しており、古典に親しませるための有効な方策なのではないかと考えるに至りました。